

CONTENTS

特集

地域文化で日本を元気にしよう！

- 巻頭言 12 文化による「つなぐ」力 ● 河合隼雄
- 解説1 14 「地域文化で日本を元気にしよう！」文化審議会文化政策部会報告書概要 ● 文化庁長官官房政策課
- コラム 17 わたしの旅
- 事例紹介1 18 アートを活用した新しい教育活動の構築事業 ● NPO法人STスポット横浜
- 事例紹介2 20 日立市文化少年団設立 ● 茨城県日立市
- 事例紹介3 22 「地域学芸員」とともに、地域個性の発信 ● 滋賀県能登川町立博物館
- 事例紹介4 24 地域、みんなでメセナする ● NPO法人大田まちづくり芸術支援協会
- 座談会 26 「地域文化で日本を元気にしよう！」を受けての今後の取組
(出席者) 高階秀爾／吉本光宏／田村和寿／中林正彦／(司会) 吉田大輔
- 施策紹介1 36 「文化芸術による創造のまち」支援事業 ● 文化庁文化部芸術文化課地域文化振興室
- 施策紹介2 38 伝統文化こども教室事業 ● 文化庁文化財部伝統文化課
- 施策紹介3 41 ふるさと文化再興事業 ● 文化庁文化財部伝統文化課
- 施策紹介4 42 本物の舞台芸術体験事業 ● 文化庁文化部芸術文化課地域文化振興室
- 施策紹介5 44 学校への芸術家等派遣事業 ● 文化庁文化部芸術文化課地域文化振興室
- 施策紹介6 46 文化体験プログラム支援事業 ● 文化庁文化部芸術文化課地域文化振興室
- 解説2 48 「文化力」で日本の社会を元気に！ ● 文化庁長官官房政策課

特別記事

耐震化の推進など今後の学校施設整備の在り方

- 52 耐震化の推進など今後の学校施設整備の在り方について(報告)
● 大臣官房文教施設企画部施設企画課
- 57 学校施設の耐震性の向上 ● 大臣官房文教施設企画部施設企画課
- 59 平成17年度公立学校施設の耐震改修状況調査結果 ● 大臣官房文教施設企画部施設助成課
- 60 耐震化と学校施設整備の考え方 ● 藤田正人
- 61 小田原市の学校施設の耐震化と質的向上 ● 松本 章

82 鑑賞席
84 編集後記

80 都道府県発
教育・科学技術・学術・文化・スポーツ・ユニコム
● 青森県弘前市、仙台市、
滋賀県、佐賀県

76 海外最新情報

74 「科学技術と社会」最前線
● 国立科学博物館・日本科学未来館
の取組

72 我が国における基幹技術と
大規模研究開発
● 我が国の繁栄と安全のための
海洋科学技術

70 自分大好き体験！
● 国立磐梯青年の家

66 焦点—文教・科学技術施策
● 変わる大学教育改革②
指定について

62 焦点—文教・科学技術施策
● 史跡名勝天然記念物の
指定について

8 インフオメーション

6 あのかにこはなし ● 假屋崎省吾

カラー

1 あたらしい学舎(まなびやPart II)
● 福島県二本松市立
安達太良小学校

4 トビックス 文部科学省の窓

表2 温故知新 ● 銅人形

表3 温故知新

● 精子中の微量スズ検出に
世界で初めて成功

●出席者(左から順に敬称略)

高階 秀爾
たかしな しゅうじ
美術評論家

吉本 光宏
よしもと みつひろ
(株)ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室長

田村 和寿
たむら かずき
(株)都市計画連合アトリエ
代表取締役

中林 正彦
なかばやし まさひこ
三重県総合文化センター
副理事長兼事務局長

●司会

吉田 大輔
よしただいすけ
文化庁長官官房政策課長



座談会

「地域文化で日本を元気にしよう!」を 受けての今後の取組

に根ざしたものであると思います。

したがって、私はまず風土に根ざした文化が重要であろうと思います。その風土というのは歴史も含めてですが、日本の極めて多様な風土、それぞれの地域のものを生かしていく。そこで地域文化によって日本を元気にしようという話になってきます。

この報告書の中でたいへん重要なのは「第三章」で、事例がいろいろ挙がっているのです。これを見ていただくと、それぞれの地域の持つ歴史なり風土なり、あるいは人々の価値観に応じてさまざまな工夫がされている。地域文化というのが生まれてきた背景をそれぞれの地域で考えていただいて、こちらではこういうことをしようということが出てくれば、日本はこれから元気になるのではなかろうか。そういう思いでこれをまとめさせていただいて、私としては事例がたいへんにありがたいと受け取っています。

●吉田 続いて、吉本さん、いかがでしょうか。

●吉本 今日のキーワードになっている「地域文化」というものの定義をどうとらえるかということを考え始めると、審議

●吉田 お忙しいところを本座談会にご参集いただきまして、ありがとうございます。

本日は、本年二月に公表されました文化審議会文化政策部会報告書「地域文化で日本を元気にしよう!」を受けまして、今後、各地域でどのように具体化していくべきなのかについて、それぞれのお立場からご意見を賜ればと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

まず、本報告書の意義について、文化政策部会の部長として取りまとめたいただきました高階先生からお話しいただきたいと存じます。

報告書の意義

●高階 文化審議会でもつて二月に、「地域文化で日本を元気にしよう!」という報告を出させていただいたわけです。これは「今、なぜ地域文化か」ということと、地域文化に関する現在の状況について、質的な変化と多くの事例を提示して、地域文化によって元気を出していこうという趣旨でつくられています。

文化というのは本来の性質として地域

会でもすいぶん議論になったのですが、なかなか難しい。そのときにとらえ方としていろいろな視点があつて、特にグローバル化の中で地域をどうとらえるかということが、これからますます重要になるのではないかという気がしています。

従来の価値観でいくと、対「東京」という概念として「地域文化」というとらえられ方をしていたことが多かったと思います。ところが、国際的に見ると、グローバル化が進展することで、東京というのはどこにもあるものでしなくなりました。あるという時代に今やなつてきている。従来は東京の文化にみんながあのころのような時代だったと思いますが、今はむしろ、地域の人がそれぞれ自分のところにある文化を見直したり、再発見したり、あるいは伝統とか歴史の中で培われたものをもう一回再生していく、革新していくことが重要になってくるのではないかと思います。グローバルな時代だからこそ、そうした「地域文化」が、世界のどこにもない独自で普遍的な価値を持つ、つまり今までの「東京―地方」という関係が逆転しつつある時代だといえると思います。



●高階秀爾氏
1954年フランス政府給費留学生として、パリ大学附属美術研究所で近代美術史を専攻。帰国後、東京大学文学部教授、国立西洋美術館館長、文化審議会会長などを歴任。現在大原美術館館長。

●吉田 田村先生、お読みいただいてどうでしょうか。

●田村 拝見しまして、非常にすばらしい。ただ、「地域文化で日本を元気にしよう!」という言い方ですが、私は「しよう!」ではなくて、「文化だけは元気があった」という感じがあるし、「文化だけは元気を保ってきた」という確信があるので、そこをもちと自信を持っておっしゃるべきではないかという気がします。

一番目は、たくさん事例があるので、我々が地域づくりの中で文化を問うということは、芸術文化だけではなくて、生活文化から産業文化までいろいろあります。

私もこれまで三〇年ぐらい、昭和五〇年代から地域文化行政を中心に地域づくりを考えてきたのですが、一つの地域で考えますと、文化というのは一体化して見えるのですが、そこに横断している文化は三つぐらいあると思うのです。

一つは、まさに高階先生がおっしゃったように、風土とかそういうものに根付いた伝統的な文化です。

それから、これはいけばんボビュラーなのですが、近代教養文化です。三番目に

くるのは、サブカルチャーを含んだ広範囲な現代文化です。

こういう三層があると思うのです。これをそれぞれの地域がどうこなしていくか。そこに対して地域が、公共がどうスタンスを持つかということが大きな問題だと思っています。

●吉田 中林さん、いかがでしょうか。

●中林 この報告書の「第一章」で、「地域社会を活性化させる文化」という、文化の一つの本質的な面がとらえられていて、その中で「文化力」ということをいわれています。私どもの知事も最近、「文化力指針」というのをつくろうではないかと。というのは、文化というのをもっと幅広くとらえて、文化の力というのは、人間にいろいろな力を与える、地域に力を与える。その力を与えられた人間なり地域がまた文化をつくっていくということ、循環していくといいますが、そういうものを繰り返ししていく。だから、文化というのは力強いわけです。日本が元気がないからこれを書いてあるのだと思いますが、文化というのは元気があったのだと思います。

そういう意味で、今、地域にしろ、日

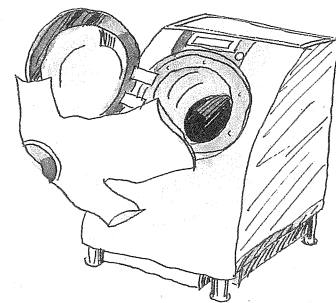
の積み重ねが日本も元気になるしということを書いていて、こういうかたちで考えていかなければならないのかなと思ったわけです。

それを具体的に取組む我々として、「第三章」で書かれている事例というのは、いろいろなかたちでとらえておられ、参考になる。

「第四章」では、指定管理者のことが書いてありまして、これから地方公共団体は指定管理者の導入に当たってはいろいろと注意すべきという書き方がしてあります。私どもは地方公共団体ではなくて、文化施設の管理者という立場ですが、まさにこのことを地方公共団体に考えてほしいと思います。

指定管理者制度

●吉田 指定管理者制度の話が出ましたけれども、吉本さんは全国的にそういったものを探つていらつしやいますので、それは今後、地域文化の振興の中では、指定管理者制度の運営をどういうかたちでやっていくかというのは大きな課題になってくると思いますが、そのあたりはどう



本にしろ、いろいろなところが抱えているいろいろな問題とか、新しいものをつくっていくというときに、文化力が大事であろうということで、これから施策を考えるうえで、施策の基本というかたちで、文化力を取り入れていく。「文化力指針」をつくって、いろいろな施策を考える場合に、この施策は「文化力指針」に合っているかどうか、どういうふうにあいやっていったら文化力を高めるのに役立つかということをやっていくれば、三重県も元気になるという話なのです。それですか。

●吉本 今の指定管理者制度をめぐる議論は、どういう条例をつくるかとか、公募をどのような方法で行うかなど、「手続論」に偏っている気がします。この報告書の中にもあるように「文化施設が本来有する使命や目的、地域における役割などを踏まえ、それらが達成できるように、その文化的側面にも十分配慮して運用を行うこと」、まさに短い言葉ですが、これがこの制度の本質だと思うのです。効率化とか、経費の削減ばかりに流れてしまふのは危険なことだと思います。

今まで、文化政策や文化行政は、いろいろな政策の中で一つの領域として存在していたと思いますが、中林さんのおっしゃった三重県の「文化力指針」というのは、指定管理者制度でクローズアップされがちな、効率性や経済性とは異なる文化的な視点で政策全体をくし刺しするようなものだと思うのです。

●中林 だと思えます。

●吉本 その話を伺って思い出したことがあるのですが、先日、東京国際フォーラムで『ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」』という音楽祭が行わ



●吉本光宏氏

社会学研究所などを経て、1989年から(株)ニッセイ基礎研究所に所属。東京オペラシティ等の文化施設開発やさまざまな文化事業のコンサルタントとして活躍するほか、文化政策やアートNPOなどアートマネジメント分野での幅広い調査研究に取り組む。

れました。そのときにフランスのナント市の副市長さんがおふたりいらつしゃって、おひとりは文化担当の方だったのですが、ちよつとしたフォーラムが開かれました。そのときの話に私はたいへん共感した部分があります。

ナント市はたしか人口が五〇一六〇万人の都市で、造船業で栄えていたのですが、ある時期、造船業の衰退で、まちが活気を失い、人口減少に苦しんでいたらしいのです。一九九〇年ごろに現市長のエローさんという方が出てこられて、要するに文化で都市を再生するという公約のもとに当選されたそうです。その後、いろいろな政策を打たれて、今やナント市というのはフランスで最も住んでみたい都市の一つになっているそうですが、なんと市の総予算の二五% (六五〇〇万ユーロ) が文化予算だということです。日本円に直すと約九〇億円ですが、人口五〇一六〇万人ですから、一人当たり一万五〇〇〇一六〇〇〇円。仮に東京都の二二〇〇万人で換算すると、一九〇〇億円ぐらいで、文化庁の予算の倍の規模になってしまいます。

その話を聞いて私は、市民から反対が

どもたちと楽しめる、家族で楽しめる、そういう文化が日常的にあるところに、優良な企業が来るということです。優良な企業は優秀な人材が欲しい。優秀な人材はそういう環境が整った都市にやつてくるということをおっしゃっていました。

日本で、文化で地域を活性化するというときに、果たしてそこまでの広い哲学というか、理念を持つて行われているところはまだまだないのかなという気がして、今、三重県でそういうことをやられているのだというのを聞いて、私はぜひ知事を応援したいと思ったのですけれども。●中林 私「文化力指針」というのがどんなかたちで出てくるかというのは、楽しみにしています。

ただ、昔、よくいわれた行政の文化化とか、予算の何%を文化に使うということより、質の高いものという意味で期待しているのです。

●高階 文化力を実際の戦略として、地方なり、あるいは国もそうですが、どういうかたちで具体化していくか。

ナントみたいところで、文化による復興を公約する政治家が出てきたというのは、日本ではなかなか考えられないし、そ

出ないか、あるいは議員の賛同は得られるのかということをお尋ねしたのです。そのときに返ってきた答えは、エロー市長がその政策を打ち出したときに、市民がとにかく元気がない。この報告書も「元気にしよう」ということなのですが、都市を元気にするには文化が必要だということ、そういう哲学のもとでその政策が走り出したということです。もちろんそれに反対する市民もいるそうですが、それは丁寧な説明をして、実際にいろいろな事業が行われる中で、まちが元気になってきているということだと思っています。

もう一つたいへん印象的だった副市長さんの発言に、「我々の将来をアーティストに託す」というものがあります。副市長さんでそういうことをおっしゃる方がフランスにはいるのだと、そのことにもたいへん驚きを覚えたわけです。

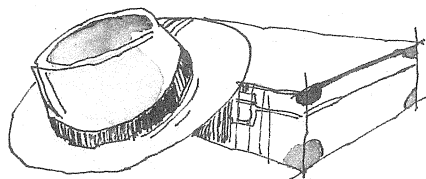
中林さんがおっしゃった、知事が「文化力指針」をつくらうというのは、まさにナント市の政策と哲学的な面で相通じる部分があると思うし、日本でもそういう都市なり自治体が出てきたのだなという気がします。

そのときにもう一つ、地域における文

化が当選するということはもつと考えられない。だから、これはみんなの考え方もあると思うのです。つまり、あまりにも経済復興と、その後に続くバブルと低迷のために、経済的なことばかり考えているので、指定管理者制度に対する問題は、経済的な視点が強すぎているのです。

したがって、文化も実はお金になりますよという点が逆に誇張されてきている。それはもちろん大事です。文化が産業を誘致するとか、文化産業という言葉があります。あるいは、観光として人を集める。しかし、お金が入るから文化をやるわけではないので。文化の普及効果はあるけれども、入らなくてもやらなければいけない部分は当然あるわけです。そのことをきちんと考えていって、そのためには、今おっしゃった文化力みたいなことを政策とした場合に、その政策の現れ方として、例えばアーティストに将来を託す。一%法案というのがフランスにございます。公共建築物をつくるときに、総工費の一%は芸術に充てるという法律です。

アメリカのニューヨークの場合ですと、



化の役割を考えさせられるお話がありました。つまり、日本でも、文化で地域を活性化させるということは従来からよくいわれていますが、それは例えば文化的な催しや、文化施設の運営によって、人がおおぜい来て、経済的な波及効果があるとか、あるいは最近、せいぜい観光政策と文化が結びつけられるということだと思ふのです。

確かにそういう側面もあると思います。が、ナント市の方がおっしゃっていたのは、そこに住む人々が、例えば夫婦で子



●田村和寿氏
大学在学中から都市・地域問題に興味を持ち、以降広く関連する調査・計画・コーディネート等に携わる。1976年(株)都市計画連合アトリエを創設、現在にいたる。

あそこも最初は公共建築物について、連邦政府が発注するものは、ある程度までは一%、それを超えれば〇・五%芸術に充てるといふ法律があります。さらにだれに頼むかというときの調査ファイルを用意しているのです。そういうのは直接お金にならないけれども、大事だと思うのです。こういう芸術家がいますよということとは、ニューヨークに部署があつて、こういう芸術家がいずれ出るかもしれないというファイルがあるのです。それを常に更新しているわけです。今度新しいのが出てきたとか、これは今はこういうことしかやらないとか。そういう意味で美術館なり文化施設を含めて、今申し上げたのは美術家ですが、音楽家でも、演劇でも同様だと思います。そういう資料の整備とか、歴史の記録の積み重ねとか、そういうものをきちんとしたうえで、それはすぐ目に見えるかたちのお祭りにならないにしても、文化力になっていく。

文化というのは積み重ねですからね。蓄積をどうやっていくかということ、実際の戦略では考えていっていただきたいという気がします。

●田村 報告書に二十いくつかの事例が

を育てるという循環があつて、三〇年で一世代で、そこで結果が出てくる。その間に蓄積が当然あるわけですから、その視点を行政も、我々市民も持つてほしいのです。ただ文化施設があるから、すぐどうなるかということだと、文化を公約にする首長は当選しないということになる。

●中村 田村先生がおっしゃったように、例えば私どもの今度の「文化力指針」というのが仮にできて、それを運営するのが県職員とか、私も県職員出身ですが(笑)、その辺だけがやっていたら、やはりうまくいかないのではないかと思います。

●田村 行政の方ができないことはないと思つています。これだけの文化国家なのに、それに気がついておられない。

●吉本 そういう意味では、この事例の中にNPOの取組がずいぶん出てきていて、行政セクター以外の公益的なセクターとして台頭してきている点に期待したいと私は個人的に思います。

各地のNPOを取材しますと、なかなか難しい面もあつて、基本的にお金がない、人手もないという中でがんばつてい

ありますでしょう。これを読んでいて気がついていたのは、全部三〇年ぐらいの歴史を持つている場所との印象があります。先ほど「行政の文化化」という言葉を出されましたが、それを私が提案したのは昭和四八年でした。これは梅棹忠夫先生のご発想だったのですが、文化行政のこれからを考えようというときに、教育と文化の関係はどうしているかということ、教育というのは人間がチャージしていく段階。だけど、ある段階にきた人間がデイスチャージしていくのが文化だろうということ、そして、そのときに、まちづくりと文化を結びつけよう。だから、芸術文化だけを文化と考えるのではなくてということでもっと広いグラウンドを考えたのです。

私の感じとしては、文化の実像と文化政策は違うものだと思つています。それを切り結ぶために行政が間に立つためには、行政自身が文化を理解しなければだめだ。だから、昨日まで税務を担当していた方が、今日文化行政の職員になつて何ができるかというような話を強引にしたことがあります。

そのことを強く応援していただいた知

るわけです。地域でも何か文化的なことをやりたいというパッションはだれよりも強いということがあつたわけです。芸術や文化というものはパッションがないところには生まれてこないと思うのです。ところが、パッションだけでは、一年や二年は勢いでもつても、そこから先が続かなくなりまふ。そこで行政とパートナーシップを組めば、もたれ合うということではなくて、お互いがお互いの立場でできることを手を携えてやっていく。「新しい『公共』」ということもこのごろよくいわれますから、地域から地域独自の「新しい『公共』」というものが芽生えてくる。しかも文化には、他の分野と比べてそうした新しい公共を切り拓いていくポテンシャルがあるのではないかと思います。

地域文化振興におけるNPOの役割

●吉田 NPOの話がありました、そのあたりについてもう少しかがでしようか。

●田村 ここでも出てきたように、NPOあたりを中心に新しいエネルギーが芽生えてきている。

事さんに神奈川県長洲さんとか、埼玉県秦さんとか、滋賀県の武村さんとか、大阪府の岸さんとか、そういう方がいらつしやう、都道府県とか指定都市のレベルでたくさん動きがあつたのを記憶しています。

やはり文化というのは、今日明日こうだというのではなくて、少なくとも三〇年、戦後の六〇年みたいな感覚が人の中に生きており、先ほど三つの層があると言いましたけれども、それは生活を楽しむ世界でつながつていふと思つています。それらが通底するところに、まちの文化的雰囲気生まれ、それが対象化され政策化されていくというのが一つの大きなイメージとしてあるのではないでしようか。

●高階 時間をかけないといけないですね。

●田村 そうですね。

●高階 中林さんがおっしゃった、文化は人にかかわる、地域と文化の間に人という概念があつて、人を育てるのには時間がかかるわけです。これは教育がもちろん入ります。地域が文化を育てるけれども、文化が人を育てる。人がまた地域



●中林正彦氏
三重県教育委員会教育
長を経て2003年より
現職。

●吉本 そうですね。なおかつ、経営マインドのあるNPOがやっとな出てきています。そうした自立してやっていくという動きに期待したいですね。

●田村 新しいジャンル、テーマ、組合せも出てきていますしね。おもしろい時代になってきているなという感じがすごくあるのです。

●吉本 NPOで最近思うのは、指定管理者制度の問題と共通する部分があるということです。指定管理者制度では、効率や経済性を追求する一方で文化的な価値、公共的な価値も重視しなければならぬ。つまり一見相反するものを追い求めるためにはいけないですね。NPOというのはそれを原理的に背負わされていると思うのです。

●田村 そうそう。スタートからそうなのです。

●吉本 お金がないから、とにかく経費節減というのはすごくシビアなわけなんです。だけど、文化的な価値というのは彼らのミッションの中にたたき込まれているので、それは絶対切り捨てないわけです。そこにアート系のNPOのポテンシャルがあるような気がしています。指定管理者

制度でいろいろな文化施設が悩まれていることは、実はNPOが日々直面していることとダブっているのではないかと気がします。

●中林 三重県では、文化系のNPOというのには、そういう意味で活動しているNPOはないのです。今まで文化団体連合会というのがあって、それをNPO法人化したことはしたのですが、指定管理者として将来、我々財団にとって競争相手になるのは、本当に文化をやりたいNPOの方々だと思います。そうならば、我々はいっしょにやったらいいのではないかと感じています。

●吉本 NPOが指定管理者を担えるかという点、体力の面でも、広い分野をカバーできる専門能力という面でも、まだそこまでの実力のあるNPOは育っていないと思うのです。だけど、経営の構造の部分がすごく似ているのではないかと、いうことを申し上げたかったのです。

●中林 というよりも、思いというのがいちばん強いのです。だから、うまくいけばいちばんうまいこといくという方式だと思います。

●田村 可能性は大きいと思いますよ、

これから。
●中林 我々にとってもスタッフといいますが、文化に携わる人材を育成していくのが、将来的に問題になっていくのです。そういうときには、NPOの方々とか、文化ボランティアの方々と手を組んでいかないと、収益性、文化性、そのバランスをとっていくのはかなり難しいという気がするのはです。

●高階 指定管理者の場合に、企業が名のりを挙げているということはあります。か。

●中林 かなりあります。

●吉本 島根の美術館がそうですね、管理のほうは。

●高階 企業という場合、経営マインドはいっぱいあるわけです。果たして文化マインドがあるかというのが、逆にいえば心配になるのですが。実際には企業のほうで、人材を養成しようとか、文化的なノウハウを入れようというのを、企業によつてはいろいろ一所懸命やっていると、ころがあつて、そこも一つ、これからの可能性だと思っています。

企業が利潤追求でない活動をする場合のバックグラウンドはもちろん必要で、そ

れは企業の中の問題としてあるのですが、メセナ活動全体ともつながりますが、それは単にお金になるからとか、あるいは経営はこつちが専門家だからというのではなくて、文化にパッションを持っているところが、人材も養成するし、少し歴史も学んで、そういうことをきちんとやりたいというのが出てくるポテンシャルがあるという気がしているのです。そこはもう一つNPOと並んで期待できるところだと思っています。

●中林 メセナ活動の一つのスタイルとしては当然ありうるのですね。

●吉本 企業メセナのご担当の方の中にもNPOを注目しているといいますが、NPOの専門的な知識や経験をして、どのようなメセナをするのがいちばん効果的かということで、パートナーとして考えるというケースも増えてきております。

ただ、正直なところ、なかなかそういう相談相手にできそうなNPOがまだまだ日本には育っていないということがあるんです。ただ、多少そういうリスクを冒しながら、そこにチャレンジしていかないと多様なNPOが育ってこないという気がします。



●吉田大輔
文化庁長官官房政策課長

●田村 企業もいくつか例が出ていますが、かなり温度差というか、外側からどの程度の密度があるかというのがよくわかりますね。報告書の中でも(株)フエリシモさんなどの例はとてもおもしろいですね。

●吉田 メセナ協議会のアンケートなどからすると、確かに企業の意識が変わりつつあるというのは、相当出てきていますね。

●中林 報告書では、メセナに参加されている企業の意識はかなり高いですね。

●吉田 本日は、たいへん貴重な意見をいただきまして、まことにありがとうございます。(了)

特集

義務教育の改革について

●卷頭言

●報告に当たって

中山成彬

鳥居泰彦

◆ ◆ ◆

岐阜県立大垣桜高等学校

あのひとに——このはなし——中畑 清

投稿
歡迎

「読者からのたより」欄への投稿、「文部科学時報読者アンケート」を歓迎します。本誌を読んだの感想、御意見等をお寄せください。

●「読者からのたより」投稿規定

①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記(誌上匿名可) ③掲載分には薄謝進呈

※文章を一部手直しさせていただくことがあります。

〒100-8959 東京都千代田区丸の内2-5-1
文部科学省大臣官房政策課「文部科学時報」編集部
※電子メールでも受け付けております。

●「文部科学時報読者アンケート」

文部科学時報読者アンケートは添付のはがきのほかに電子メールでも受け付けております。
宛先名「ijih@mext.go.jp」

コンピュータネットワークを
利用した文教行政の広報

文部科学省では、我が国の文教施策等を広く皆様に紹介するため、インターネットホームページを利用して情報を提供しています。また、子どもホームページを設け、情報を提供しています。

ホームページアドレス:

<http://www.mext.go.jp/> (半角入力)

子どもホームページアドレス:

<http://www.mext.go.jp/kodomo/index.htm>

▽長く蒸し曇り梅雨の季節が過ぎ去ってさわやかな夏が始まろうとしています。いよいよアウトドアライフを楽しむ季節となり海水浴や登山の時期となりました。

▽毎年夏には、麦茶替わりに乾燥どくだみをせんじて飲んでいましたが、今年は、ハーブ系のパーミントに挑戦してみることにします。解毒作用や胃の健康、殺菌や抗ウィルス効果があり、さらにレモン汁、ショウガ汁、オリゴ糖を加えると飲みやすいだけでなく血液循環がよくなり新陳代謝を高め肥満を解消するそうですので試してみることになります。

▽今月号の特集は、「地域文化で日本

を元気にしよう！」です。昔の五穀豊稔祈願祭や能などの回り舞台を見る機会に恵まりましたが継承されていく芸能や伝承文化は、自然とともに大切にしていかなければならないものと思います。特集では、文化芸術活動の地域のつながりや関係者の具体的な取組などが数多く紹介されており、

▽また、特別記事では、「耐震化の推進など今後の学校施設整備の在り方」です。地域住民の応急避難場所の役割を持つ学校の施設整備の趣旨やこれからの学校施設整備などについての記事が掲載されておりますのでぜひ一読願います。

（唐）

(唐)

MEXT.61 月刊

文部科学時報 7月号

第1552号

● 著作権所有——文部科学省©

●発行所——株式会社ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 03-5349-6666 (營業部)

URL <http://www.gyosei.co.jp>

- ぎょうせいデジタル株式会社

●印刷所——ぎょうせいデジタル株式会社

平成17年7月10日印刷

平成17年7月10日発行

定価610円 本体581円 (〒84円)

年間購読料 7,320 円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはもよりの書店にてお願いします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 2005 ISSN 1346-325X ●この刊行物は再生紙を使用しています。